

西脇市

# 高松3号墳

—— 175号西脇バイパス事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

平成25(2013)年2月

兵庫県教育委員会



西脇市

# 高松3号墳

—— 175号西脇バイパス事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

平成25(2013)年2月

兵庫県教育委員会





遠景 南から



高松3号墳全景



横穴式石室



埴丘基底部

## 例　言

1. 本書は、兵庫県西脇市野村町藏谷に所在する高松古墳群中の3号墳である「高松3号墳」(たかまつ3ごうふん)の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、国道175号西脇バイパス事業に付随する西脇バイパス和布地区他改良工事事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所の依頼に基づき、平成21年度に、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館を調査機関として実施した。
3. 本報告書作成にかかる整理作業は、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、平成23年度に兵庫県立考古博物館が、平成24年度に公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。
4. 調査の推移  
(発掘作業)  
確認調査 平成20年7月23日  
実施機関：兵庫県立考古博物館  
本発掘調査 平成21年11月5日～平成22年1月15日  
実施機関：兵庫県立考古博物館  
工事請負：門上建設株式会社  
(出土品整理作業)  
平成23年7月1日～平成24年2月29日  
実施機関：兵庫県立考古博物館  
平成24年7月20日～平成25年2月28日  
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
5. 本報告書掲載の地形図は、図版1は国土交通省提供の図及び西脇市教育委員会発行の図を基にした。第2図は国土地理院発行の図を基とした兵庫県教育委員会発行「兵庫県遺跡地図」を基に作成した。図版1の位置図は国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所作成の図を使用した。また、図版1の高松古墳群分布図および写真図版4上は「高松古墳群」「西脇市古墳調査集報」西脇市文化財調査報告書第12集「西脇市教育委員会2002調査時のもの」を使用した。また図版2下の全体図は株式会社エイティックによる空中写真測量によるものを使用した。その他の実測図は調査担当者、補助員および嘱託職員によるものを使用した。
6. 遺物写真は株地域文化財研究所に撮影を委託した。航空写真は株式会社エイティック撮影のものを使用した。
7. 本報告書は、岡田美穂の補助の下、別府洋二が編集した。
8. 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
9. 発掘調査、整理作業に際して以下の方々の指導・助言、協力を受けました。  
記して感謝いたします。(順不同、敬称略)  
岸本一郎、小川真理子



## 目 次

第1章 調査の経緯.....	(別府洋二、甲斐昭光)	1
第2章 遺跡の環境.....	(別府)	5
第3章 調査.....	(別府、甲斐、山本誠)	9
第4章 まとめ.....	(別府)	17

## 挿図目次

第1図 西脇市における古墳時代の遺跡地図（加古川・杉原川流域）.....	8
第2図 石器.....	15

## 表 目 次

第1表 高松古墳群調査結果（昭和49年度）一覧表.....	2
第2表 西脇市における古墳時代の遺跡地名表（加古川・杉原川流域）.....	7
第3表 遺物觀察表.....	16

## 図版目次

図版1 高松古墳群と3号墳の位置
図版2 調査前及び列石検出時地形測量図
図版3 墳丘土層断面図
図版4 列石平立面図
図版5 墳丘基底石列・石室掘方
図版6 石室平立面図
図版7 石室細部
図版8 遺物出土状況図
図版9 出土遺物

## 写真図版目次

- 写真図版1 全景 高松3号墳全景
- 写真図版2 遠景 南西から、北西から
- 写真図版3 遠景 西から、北から、北西から
- 写真図版4 墳丘 調査前の3号墳、調査前の3号墳
- 写真図版5 墳丘 調査前の3号墳、調査前の3号墳、調査開始直後
- 写真図版6 墳丘 墳頂部の列石、墳頂部の列石、墳丘東側の列石
- 写真図版7 墳丘 墳丘北西側の列石、列石検出状況、列石検出状況
- 写真図版8 墳丘 墳丘断ち割り断面、墳丘断ち割り断面、墳丘断ち割り断面
- 写真図版9 墳丘 墳丘断面西側列石部、墳丘断面東側列石部、墳丘断面北側列石部
- 写真図版10 墳丘 列石検出状況、西側列石、西側列石
- 写真図版11 墳丘 西側列石、西側列石、西側列石
- 写真図版12 墳丘 墳丘基底面検出、墳丘基底面検出
- 写真図版13 墳丘 石室基底石と墳丘基底配石、墳丘基底配石
- 写真図版14 石室 横穴式石室全景、玄室全景 玄門部から
- 写真図版15 石室 玄室全景 奥壁から、玄門部 補石の状況
- 写真図版16 石室 渓道 玄門部の状況、渓道、渓門部閉塞
- 写真図版17 石室 玄室奥壁の状況、玄室右側壁の状況、玄室左側壁の状況
- 写真図版18 石室 左側壁の石積み、左側壁の石積み、右側壁の石積み、奥壁右の背面
- 写真図版19 石室 石室基底石、基底石掘方
- 写真図版20 石室 玄室内遺物出土状況、玄室内遺物出土状況、周溝遺物出土状況
- 写真図版21 高松古墳群 高松1号墳石室奥壁、高松2号墳、高松4号墳石室奥壁
- 写真図版22 出土遺物 土器・鉄器・石器

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

高松古墳群では昭和42（1967）年度の分布調査では13基の古墳が確認されていたが、その後、昭和47（1972）年度の第2次分布調査では造成工事などで破壊・埋没していることが判明した。

昭和49（1974）年度には西脇市教育委員会を調査主体として、古墳群の現状測量調査および、7号墳、13号墳、26号墳の発掘調査を実施している。現状では14基確認されている古墳群のはとんどが横穴式石室墳とされている。

### 高松古墳群

高松古墳群では現在、14基の古墳が確認されているが、1号墳はその中で最も規模の大きなものである。直径18.0m、高さ6.5mを測る円墳で、面積のみならず高さは他を圧倒している。横穴式石室の一部がのぞいており、天井付近の奥壁、側壁は持ち送りの技法をもって構築されている。

1号墳の南に並ぶ4号墳も長径17.0m、短径14.0m、高さ2.0mの大型の円墳で、玄室長5.5m、同幅1.9mの片袖の横穴式石室が一部露出している。奥壁は巨大な1枚の板石を立てて鏡石としている。

3号墳の南に位置する2号墳は直径16.0m、高さ2.9mの円墳で、横穴式石室を構築していたと考えられる大きめの石材が散乱しており、一部の石材には後後に石を割り取った矢穴が見られる。

3号墳に最も近い8号墳は直径11.5m、高さ1.7mの円墳で、1～4号墳と比べて著しく小型・低墳丘である。周囲にはこの大きさの古墳がまだ埋没している可能性がある。

発掘調査が実施された7号墳は直径8.0m、高さ1.2mの小型の円墳で、無袖の横穴式石室をもち、石室内に3基の組合式箱式石棺が納められていた。石室全長3.8m、幅0.6mを測る。TK46・48型式併行期の須恵器が出土している。

同じく発掘調査が実施された26号墳は現存直径13.5m、高さ3.7mの円墳で、右袖を有する横穴式石室を有している。外部施設は確認されていない。比較的小型の割り石を横手積みして9～10段にわたってほぼ直に2.3m積み上げている。石室の現存全長は8.5m、玄室長は5.2m。羨道の幅は1m以上あつたものと考えられる。TK209、TK217型式中段階墳の須恵器が出土している。

北西方向に向かって伸びる尾根筋上に3→8→2→1→4号墳と千鳥状に並んでおり、その南の山腹に立地する7・9・10・23・26号墳などとは別の群を構成するものと思われる。発掘調査が実施された古墳でも墳丘全体の調査は実施されておらず、列石などは確認されていない。

国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所は、国道175号西脇北バイパスを計画しており、それに伴い兵庫県立考古博物館では津万遺跡群や大門畠瀬散布地などの埋蔵文化財の調査を実施している。

国道175号西脇北バイパスの南に連続する西脇バイパスでは、すでに片側のみ開通していた西脇トンネルの4車線化工事に際して、トンネル南口に隣接した高松古墳群の取り扱いが協議された。平成15年度には該当地区の分布調査を実施し、高松3号墳の墳裾が工事範囲内にかかる可能性があることが判明した。

高松古墳群 昭和49年度に実施された高松古墳群の調査結果を一覧表にまとめる。

第1表 高松古墳群調査結果（昭和49年度）一覧表

	直径(m)	高さ(m)	墳丘	埋葬施設	備考
1号墳	18.0	6.5	円形	横穴式石室 (玄室幅1.1m、側壁・奥壁は持ち送り)	
2号墳	16.0	2.9	円形	横穴式石室か	
3号墳	14.5	2.5	円形	横穴式石室	
4号墳	14.0～17.0	2.0	楕円形	横穴式石室 (片袖、残存長7m、玄室幅1.9m、奥壁は1枚の割石)	
7号墳	8.0	12.0	円形	横穴式石室 (内部に箱式石棺3基)	造成工事後に発掘調査
8号墳	11.5	1.7	円形	不明	
9号墳	12.0	2.7	円形	横穴式石室	
10号墳	9.4	2.2	円形	不明	
11号墳	5.0	0.5	円形		
13号墳	不明	不明	不明	横穴式石室 (側壁全長4.94m、高さ1.4m)	耳環か
23号墳	8.0	2.1	円形	横穴式石室	
24号墳	6.0	0.5	円形		
25号墳				横穴式石室	消滅
26号墳	12.5	3.7	円形	横穴式石室 (全長8.5m、玄室残存高2.3m)	造成工事後に発掘調査 子持器台など出土

\*ただし、11・23・25号墳については、兵庫県教育委員会 2011「兵庫県遺跡地図」による。

## 第2節 確認調査

分布調査の結果を受けて、平成20年3月14日付け、国近整兵調第75号による国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所長からの依頼により、工事範囲内の確認調査を実施した。この確認調査の結果では、事業用地内までは古墳の墳頂が広がっていないことが判明した。

ところがその後、西脇トンネルの工事に付随して西脇バイパス和布地区他改良工事事業が計画され、その予定地内に高松3号墳のほぼ全域が含まれていることが判明し、高松3号墳の本発掘調査を実施することとなった。

確認調査（遺跡調査番号 2008158）

期間 平成20年7月23日

担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部 調査第2班 渡辺昇、鐵 英記

調査面積 約6m<sup>2</sup>

## 第3節 本発掘調査

平成21年2月3日付け、国近整兵調第43号の依頼により、同古墳の本発掘調査を実施した。本発掘調査は、西脇トンネルの工事進捗状況に応じて開始されたため、西脇北バイパス工事予定地内で実施している津万遺跡群および大伏北山遺跡・大門畠瀬遺跡の調査と並行して実施された。

本発掘調査（遺跡調査番号 2009188）

期間 平成21年11月5日～平成22年1月15日

担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部 調査第2班 別府洋二、深江英恵、池田征弘  
調査面積 約297m<sup>2</sup>

#### 第4節 整理作業

平成23年度に、兵庫県加古郡播磨町大中の県立考古博物館および明石市魚住町の魚住分館にて出土遺物の水洗い・ネーミング、接合・補強、復元や遺物実測・写真撮影、トレース、レイアウト等の整理作業を行い、平成24年度に、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が編集し、報告書を刊行した。

##### 整理作業 平成23年度

担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部  
調査第2課 別府洋二  
整理保存課 村上泰樹、篠宮 正、山本 誠、深江英恵、岡本一秀  
水洗い・ネーミング： 小林陽子  
接合・補強： 三好綾子、佐々木愛  
復元： 萩野麻衣、藤池かづさ  
実測： 栗原美緒  
写真整理・図補正・トレース・レイアウト： 岡田美穂  
金属器保存処理： 桂 昭子、浜脇多規子  
写真撮影： (株)地域文化財研究所

##### 平成24年度

担当者 公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部  
整理保存課 村上賢治、篠宮 正

註1 西脇市教育委員会2002「高松古墳群」「西脇市古墳調査集報」西脇市文化財調査報告書第12集



## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の歴史的環境

高松古墳群の西直下を流れる加古川は、瀬戸内海に注ぎ込むが、その最上流は日本一低い分水嶺で日本海に注ぐ由良川と結ばれている。この本州を南北に貫く回廊は古くから人や自然が行き来する大動脈として利用されており、古墳時代でも同様である。

本節では、高松3号墳（103）の位置する加古川上流域の古墳時代の遺跡の動向を整理する。

対象とする範囲は西脇市域のうち加古川および杉原川流域とする。記述の便宜上、加古川流域については旧黒田庄町域を中心にした黒田地区（播磨國風土記記載の「黒田里」）、その下流の津万平野を津万地区（同「都麻里」）、さらに下流の杉原川合流地を中心とした現在の中心市街地周辺を西脇地区と呼ぶ。また、杉原川流域については、多可町安田地区以南を那珂地区（和名類聚抄記載の「那珂」）とする。なお、本書に報告する高松3号墳は西脇地区に含まれる。

#### 1 古墳時代前・中期

**集落遺跡** 市内最大の平野をもつ津万地区の大垣内遺跡（80）では、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居等が検出された。東接する岡之山古墳群と同一時期の集落遺跡であり注目される。全地区をつうじても、他に前期の集落遺跡は未発見である。

中期には、那珂地区の円満寺・東の谷遺跡（109）で堅穴住居1棟が確認された程度であり、他にも詳細の分かる遺跡は今のところ知られていない。

中期に該当するTK208型式<sup>1</sup>併行以前の須恵器窯跡等は確認されていない。

**古墳（岡之山古墳群）** 津万地区の加古川左岸に位置する、岡ノ山（標高約150m）を中心に築かれた87基の古墳を総称して岡之山古墳群<sup>2</sup>（64~74）と呼ぶ。この古墳群は、前・中期の前方後円墳をもち、豊富な副葬品や埴輪を有する古墳が多い点で他に比べて優位性をもっている。

比較的実態の分かっている前期古墳として、岡ノ山古墳（71）と滝ノ上古墳群20号墳（65）がある。岡ノ山山頂に築かれた岡ノ山古墳は加古川上流域の前期古墳で唯一の前方後円墳である。全長51.6mを測り、埋葬施設は、ボーリング調査により長さ約8mの堅穴式石室と推測されている。埴輪は確認されていない。岡ノ山北麓の段丘端に位置する滝ノ上古墳群20号墳は、土取り工事中に発見・調査された、葺石をもつ一辺16mの方墳である。埋葬施設は北頭位の割石積み堅穴式石室であり、硬玉製勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉・鉄刀・鉄槍等の副葬品が出土した。また、この石室北側には副室とされる箱式石棺状の施設があり、そこには仿製内行花文鏡・銅鏡・鐵鏡・鐵錠等が納められていた。

続く中期には、周濠と埴輪をもつ全長約30~40mの前方後円墳である芦谷水塚古墳（69）が知られるが、墳丘が消失しており、詳細は不明である。また岡ノ山西古墳群（66）の3基から円筒埴輪、蓋形埴輪片が採集されている。

**古墳（岡之山古墳群以外）** 岡之山古墳群以外の当該期の古墳については、数基の首長墓が連続して築造される例がなく、墳形についても前方後円墳、前方後方墳は認められず、突出した規模の円墳・方

<sup>1</sup> 田辺昭三 1982『須恵器大成』角川書店

<sup>2</sup> 岡ノ山古墳・芦谷水塚古墳・岡ノ山古墳群・岡ノ山北古墳・岡ノ山西古墳群・岡ノ山東古墳群・岡ノ山南古墳群・滝ノ上古墳群・西岡山古墳群を含める（西脇市教育委員会 2003『西脇市古墳調査集報』西脇市文化財調査報告書第12集）。

墳もみられない。当該期の古墳は、単独あるいは群集する形で存在するようだが、詳細が不明なため、ここでは一括して概観する。

10m程度の円墳あるいは方墳、葺石や埴輪をもつ直径20~30m程度の円墳等があり、前者には経ヶ芝古墳（102）、下戸田古墳群（91、以上西脇地区）、後者には道の上1号墳（128、那珂地区）、上本町大塚1号墳（92）、苦木古墳（99）、頬政塚古墳（105、以上西脇地区）、福地・百合山1号墳（62、津万地区）などがある。発掘調査の行われた経ヶ芝古墳の埋葬施設（箱式石棺2基）から副葬品が出土しなかったように、副葬品の乏しい古墳が多いと思われるが、黒田地区の大伏・南山1号墳（58、墳丘不詳）の箱式石棺からは、直弧文を施した鹿角形の鉄劍、鉄刀等が出土した。

## 2 古墳時代後・終末期

**集落遺跡等** 黒田地区では、黒田庄中学校遺跡（25）で弥生時代終末期～奈良時代の遺物が出土し、古墳時代後期の堅穴住居が検出された。また、大門畠瀬遺跡（61）では7世紀初頭の堅穴住居3棟が確認された。津万地区では、谷田遺跡（75）に古墳時代終末期の堅穴住居2棟等があるほか、津万遺跡群寺内地区（81）において、古墳時代中期の粘土採掘坑が確認された。那珂地区では、円満寺・東の谷遺跡（109）で7世紀後葉～8世紀初めの土器等とともに陶馬が出土した。

**須恵器窯跡** 那珂地区以外の各地区に須恵器窯跡が知られている。群集せず単独で存在しているが、詳細は不明である。黒田地区では、TK10型式併行の前坂・大歳神社窯跡（24）、TK43～TK209型式併行の田高窯跡（48）、黒田・大山谷1号窯跡（19）、黒田・中池1号窯跡（13）等4基の窯跡が加古川左岸に営まれた。また、津万地区には、TK217型式併行の北垣内池窯跡（78）が、西脇地区には、TK43～TK209型式併行の童子山窯跡（94）、谷窯跡（95）等が知られる。

**古墳** この時期の古墳はすべての地区で営まれている。傑出した内容をもつ古墳あるいは古墳群は認められない<sup>1</sup>。

黒田地区においては、加古川左岸の黒田・前坂・岡に広がる比較的大きな扇状地周辺に古墳が集中する傾向がある。10基に満たない古墳で構成される古墳群が多いが、小苗古墳群（4）には40基以上、黒田・栢木谷古墳群（10）には22基の横穴式石室墳が知られる。井原至山古墳（40、丹波市）は、MT15型式併行期の両袖式の横穴式石室をもつ古墳である。

津万地区では10基程度の古墳で構成される古墳群が多い。詳細の不明な古墳群が多いなか、寺内古墳群は、全域の測量と一部の発掘調査が行われ、28基の古墳が築造当時の姿をよくとどめていることが明らかとなり、突出した規模の7号墳を築造の契機とし、7世紀第2四半期から同末にわたり、6家族が均質的な古墳を営んだ古墳群であることが判明した。

西脇地区で横穴式石室墳が集中するのは、石ヶ谷古墳群（106）、高松古墳群（103）である。南には吉馬古墳群、上三草古墳群等のように、加東市域では横穴式石室墳が濃密に築かれており、これと同様の分布状況といえる。なお、高松7号墳（103）は、津万地区の坂本古墳群1号墳（86）と同様、加古川流域に多いとされる横穴式石室内に小石棺をもつ古墳として知られる。

那珂地区にはいくつかの古墳群が確認されているが、いずれも10基に満たない古墳で構成される。城山1号墳（113）は確認調査により横穴式石室の存在が認められた。TK10およびMT85型式併行の須恵器が出土し、多可町内で最古の横穴式石室と判明した。

<sup>1</sup> 本節の対象範囲外だが、多可町中央部の妙見山麓には、200基以上の古墳からなる大古墳群がある。北播磨でも最上位の階層に属する東山古墳群をはじめ、各階層の18古墳群からなる。

## 【参考文献】

黒田庄町 1972 「黒田庄町史」

西脇市 1983 「西脇市史」本篇

岸本一郎 1987 「兵庫県西脇市岡之山周辺の古墳」『古代学研究』113号 古代学研究会

兵庫県教育委員会 1991 「大垣内遺跡」兵庫県文化財調査報告第98号

中町教育委員会 2000 「宮ヶ谷遺跡 長坂谷遺跡 円溝寺東の谷遺跡 西安田遺跡（関連遺構）」中町文化財報告18-2

西脇市教育委員会 2003 「西脇市古墳調査集報」西脇市文化財調査報告書第12集

中町教育委員会 2004 「中町の遺跡Ⅱ 付 岡山1・2号墳、中村櫛塚」中町文化財報告30

中町教育委員会 2004 「東山野際1・2号墳 付 城山古墳群 東山古墳群 田野口・北道路」中町文化財報告31

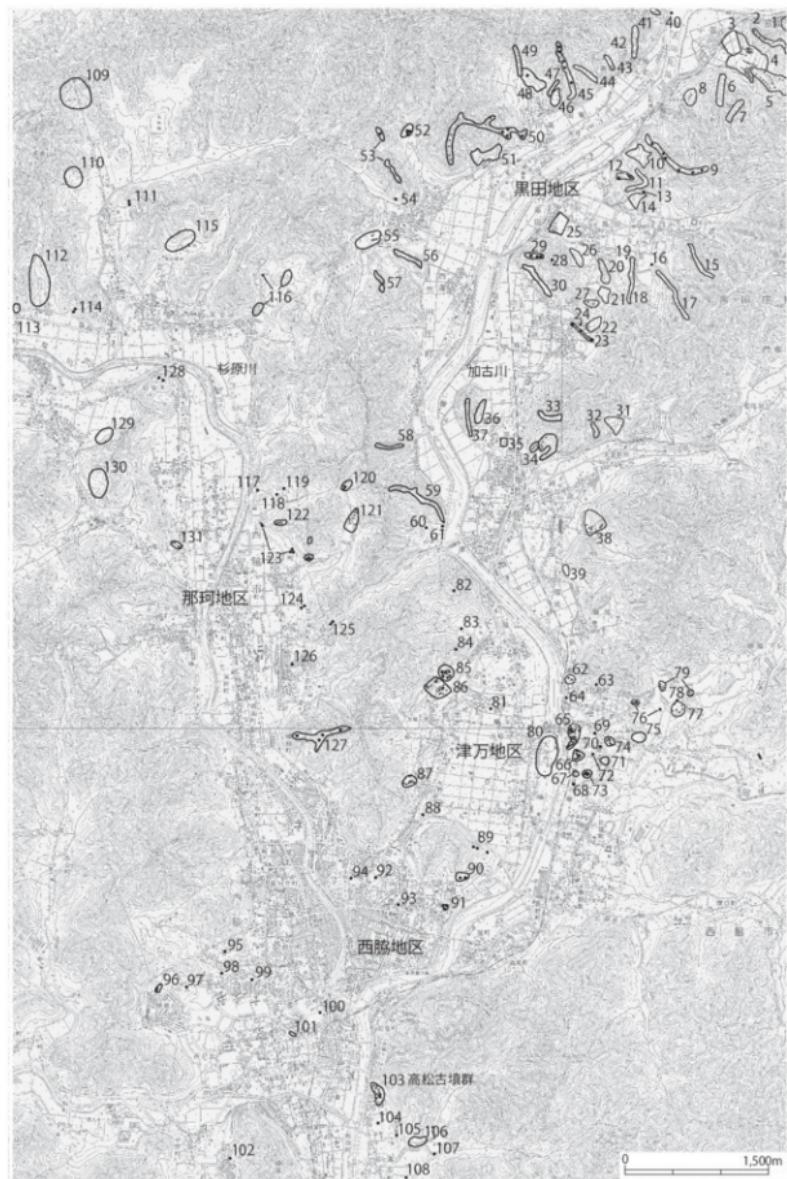
西脇市教育委員会 2004 「寺内古墳群」西脇市文化財調査報告書第13集

西脇市教育委員会 2005 「西脇市空堀調査集報」西脇市文化財調査報告書第15集

西脇市教育委員会 2007 「西脇市集落道路調査集報Ⅱ」西脇市文化財調査報告Ⅱ

第2表 西脇市における古墳時代の遺跡地名表（加古川・杉原川流域）

地区	番号	遺跡名	遺跡番号	地区	番号	遺跡名	遺跡番号
奥田	1	小畠・大森古墳群	290060~290285~290288	西脇	67	岡ノ山古墳群	140184~140193
	2	小畠・大森古墳群	290071~290278~290284		68	高木古墳群	140143
	3	小畠・大森古墳群	290269~290271		69	芦谷木古墳	140141
	4	小畠古墳群	290078		70	岡ノ山古墳	140144
	5	小畠・岩屋古墳群	290082~290294~290299~290468		71	岡ノ山古墳	140142
	6	小畠・前山古墳群	290072~290272~290277		72	岡ノ山古墳群	140207~140221
	7	小畠・前山古墳群	290074		73	岡ノ山古墳群	140194~140206
	8	奥田・クヌガ谷古墳群	290062~290264		74	西岡山古墳群	140222~140229
	9	奥田・北山古墳群	290056~290256~290262~290265~290267		75	谷田遺跡	140461
	10	奥田・楠木古墳群	290049~290234~290248~29047~290475		76	伊勢山古墳群	140230~140235~140238
	11	奥田・城山古墳群	290050~290052		77	安井神代古墳群	140247~140251~140466
	12	奥田・城山古墳群	290051~290052		78	北堀内古墳跡	140252
	13	奥田・中村櫛塚	290053		79	北堀内古墳跡	140253~140246
	14	奥田・中村櫛塚	290054~290252~290255		80	津万遺跡	140137
	15	奥田・小山古墳群	290132~290406~290408~290485		81	津万遺跡	140481
	16	奥田1号古墳	290186		82	瀧江1・2号古墳	140077
	17	奥田・南山古墳群	290129~290402~290405		83	瀧江1・大谷古墳	140079
	18	奥田・大山古墳群	290127~290401		84	瀧江・西山古墳	140078
	19	奥田・大山古墳群	290126		85	寺内古墳群	140099~140115
	20	奥田・後の裏1号古墳	290116		86	坂本古墳群	140116~140121~140128~140136
	21	奥田・前山古墳群	290117~290389~290394		87	大野古墳群	140067~140073
	22	前坂・森古墳群	290119~290396~290397		88	大野古墳	140298
	23	前坂・大森神社古墳群	290120~290398~290400		89	東八日出古墳群	140300~140304
	24	前坂・大森神社古墳群	290121		90	八日出古墳群	140305~140310~140509
	25	前坂・大森神社古墳群	290122		91	上本町大塚古墳群	140311~140314
	26	奥田・便・西古墳群	290103~290318~290320		92	上本町大塚古墳群	140296~140297
	27	前坂・森古谷古墳群	290118~290395		93	キヨツ山古墳	140300
	28	奥田・前山古墳群	290101		94	童子山古墳	140295
	29	前坂・前山古墳群	290099~290315~290317		95	谷家塚	140289
	30	前坂・北山古墳群	290321~290322		96	無野古墳群	140282~140284
	31	前坂・秋谷古墳群	290135~290411~290427		97	無野古墳	140285
	32	前坂・友屋山古墳群	290111~290375~290377		98	谷古墳	140288
	33	前坂・鶴山古墳群	290134~290409~290410		99	笠木古墳	140291
	34	前坂・友屋山古墳群	290110~290314~290318~290388~290455		100	野村・横山4号古墳	140508
	35	前坂・森古谷古墳群	290108~290336~290339		101	横山古墳群	140294~140479~140480~140508
	36	前坂・森古谷古墳群	290109~290323~290335		102	テラコ塔	140300
	37	前坂・丸山古墳群	290107		103	松古山古墳群	140315~140366
	38	同・福谷古墳群	290168~290438~290443		104	北堀内古墳	140369
	39	同・トントン古墳群	290170~290177~290444~290448		105	鶴枝原古墳	140370
	40	井原・星山古墳	800074		106	石ヶ谷古墳群	140371~140420
	41	星山古墳群	290048~290233		107	金城古墳	140430
	42	田島・井上古墳群	290047		108	平見古墳	140421
	43	田島・井上古墳群	290045		109	円満寺・東の谷古墳跡	140284
	44	田島・井上古墳群	290041~290232		110	西安田古墳群	140283~140397~140400
	45	田島・井上古墳群	290040~290228~290231		111	西脇市古墳群・西北山古墳群	260287~260288~260344~260345
	46	田島・大森神社東1号古墳	290032		112	森木古墳	260285~260297~260356
	47	田島・大森神社古墳群	290032		113	高木古墳	260312
	48	田島古墳群	290029		114	僅ヶ谷古墳群	260354~260355
	49	田島・北山1号古墳	290025		115	東安田古墳群	260289~260304
	50	上山・下山古墳群	290021~290195~290205		116	東安田古墳群	260297~260301
	51	有古塚群	290028~290206~290214		117	木太・東山古墳羣	140017
	52	石原・野屋北山古墳群	290010~290189~290190		118	前鳥古墳	140018
	53	石原・北山古墳群	290007~290188		119	前鳥・明谷古墳	140019
	54	南ノ塔古墳	290013		120	富吉・奥山北古墳群	140044~140051
	55	幡上古墳群	290012~290191~290194		121	富吉・奥山南古墳群	140035~140043
	56	石原・尾ノ山A古墳群	290089~290305~290306		122	富吉・安和山古墳群	140021~140023
	57	石原・市山古墳群	290081~290087		123	富吉・中山古墳群	140025~140034
	58	大森・古谷古墳群	290098~290309~290314		124	大木・上山古墳群	140061~140067
	59	大木・北山古墳群	290145~290145		125	富吉南古墳群	140064~140069
	60	大木・御前1号古墳	290147		126	下山古墳	140063
	61	大木・椎葉古墳	290158		127	富田山古墳群	140511~140514
	62	南郷・百合山古墳群	290181~290449		128	通の上古墳群	140000~140004
	63	伊勢山古墳群	140140		129	曾我井古墳群	260265~260267~260361~260362
	64	伊勢山ヶ丘古墳	140139		130	遠部山古墳群	260255~260363
	65	南郷上古墳群	140145~140171		131	大木・平野山古墳群	140010~140013
	66	南郷山古墳群	140172~140183				



第1図 西脇市における古墳時代の遺跡地図（加古川・杉原川流域）

## 第3章 調査

### 第1節 調査の概要

確認調査では、高松3号墳の北側周溝部からさらに北側の谷斜面にかけてトレンチを設定し、高松3号墳の墳裾の確認を主眼に調査をおこなっている。このトレンチ調査の結果、尾根稜線上に立地する3号墳より北側の谷斜面には古墳群は広がらないことも確かめられた。

また、現状では旧地形は復元しがたいが、昭和49年度調査時点の判断から、3号墳が高松古墳群中最も北側に位置していたと考えられる。

#### 3号墳の現状

調査直前の3号墳はかなり大きく育った樹木が繁茂し、昭和42年当時に比べても墳丘全体を見渡すことができない状態であった。さらに墳丘中央に見られる陥没部にも直径30cmを超える木が生えており、石室の残存状態が危ぶまれた。しかしながら丁寧に伐採を行ったところ墳形はよく残っており、尾根筋上方にも周溝と思われる溝状のくぼみが巡っていた。残存する墳頂部の高さは標高64.958mを測り、北西側の墳裾からは2.45mの高さが残存していた。

墳頂部のやや西寄りから南にかけて溝状にくぼんでおり、南向きに開口する石室が崩落していることが予想された。また、開口部の南東には最大径が0.5mまでの塊石が散乱しており、後世に盗掘された可能性を示していた。実際、発掘調査段階で、墳丘上層や周溝埋土上層のみならず、石室内埋土のかなり深い層から近世から近代頃の陶器器の破片が出土している。

また、近接する2号墳や1号墳でも石室石材が大きく動かされており、中には石を割り取った矢穴が残る石材も存在しており、石室石材を再利用するために古墳が大きく破壊され、それは古墳群全体に及んでいることが推測された。

陥没した部分から推定できる玄室の中央から石室主軸方向および直交方向に土層観察用のセクションを設け、南側の石室開口部より東側を1区とし、北東部を2区、北西部を3区、南西部を4区と反時計回りに仮の地区分けをおこなって、遺物回収の便を図った。石室内も基本的にこのセクションを用いて土層観察をおこなったが、適宜、セクションを追加した。

また、開口部東側の1区では、閉塞状況観察のため漢道左側壁上にもセクションを設けた。

### 第2節 墳丘

#### 1. 列石

墳丘全体を覆うように堆積する腐植土・表土を除去すると、墳丘表面に部分的に列状をなす石塊が現れた。(図版2) 周溝内で埋土内に浮き上がっているものや、墳丘裾部で腐植土の混じった土層上にある石は転石として取り外している。

墳頂部では、玄室右側壁上部で4個程度の石が並んでいた。これは部分的であり、側壁裏側からも検出されたため、天井石或いは斜面下方で盛上が厚くなる石室右側壁を支える控え積みの可能性が高い。また、東側の墳頂部縁辺では6個の大きめの石が並んでいるのが確認できた。さらに石室を挟んだ西側

の墳頂部縁辺でも比較的大きな石が5個並んでいるのが確認できた。墳丘裾からやや内側に入った位置では、比較的小さな石が2段に並んでいるのが確認できた。列石は断続的ではあるが、ほぼ全周を巡っているが、南側では特に乱れており列はなしでない。

墳丘裾部では墳丘からの出土物と盛土の識別が困難であったが、直径11.0～11.15mのほぼ正円に石列が巡っていることが判明した。石室開口部前面では検出されなかったが、左側壁から続く部分には東へ4個並んでいる。最も列石の残存状況が良かったのが墳丘北西部で、石室の奥壁から右側壁を廻む部分である。まずやや厚みのある石を横手積みで並べ、その後ろに盛土を施した後、その上に縱長に小口積みで石を積み上げている。さらにもう1段積み上げている箇所もあるが、後ろ側に比較的小さな石を並べており、石敷き状をなすが、上面を描えているわけではない。また、横手積みの石列の前にもう1列横手積みで石を貼り付けて並べている部分が5.4mにわたって見られる。この箇所は明らかに外装を意識したものである。この第1列の列石は1～2石の積み石を伴う列石とその背後の敷石、前面の貼り石で構成される。

第2列の列石は第1列内側の石敷きの上に一部かかるように配されており、直径8.2～9.0mのやや歪な円を描くが、所々で途切れている。石列は横手積みと小口積みを交互に配するような並べ方で、石は2石までしか積み上げていない。部分的に下層にも2段ほどの石積みが認められるが、小振りの石を用いたもので、列石とはならない。基本的には下層の墳丘基底部から積み上げたものではなく、盛土上に並べたものである。石室開口部前面と奥壁後部の石列は不明瞭である。

第3列は第2列の背後に接するように配しているが、第2列上に盛土を0.2～0.4m積んだ上に並べている。墳丘表土掘削段階で検出された墳頂部の列石はこれにあたる。墳頂部の東西に部分的にみられる。比較的大きな板石を主として縱向きの小口積みで並べているが、石を積み重ねではない。

これらの列石は、墳裾部の第1列を除くとすべて盛土上に並べられており、石を積み上げたものではない。多くは表土直下で検出されており、墳裾部の第1列では前面に石を貼り付けるように並べるなど外装的な意味合いが受けられる。

## 2. 墳丘基底部配石

これらの墳丘を構築する際に配された列石のほかに、墳丘の最下部の地山面上で検出された列石がある。墳丘盛土をすべて除去し、地山面を検出した段階で、その直上で第1列列石の約1m内側に第1列とほぼ同じ高さで検出された大振りの石が、長径9.8m、短径9.0mの円形に1.0m程度の間隔を空けて配されていることが判明した。当初、石室開口部両側に配された2石や、第1列や第3列の列石が明瞭でなかった墳丘南側などでは一部検出されていたが、そのほかの多くは第1～3列の列石を完全に取り外した下部から検出されており、これらの列石とは直接接していない。この飛び石状の配石に用いられた石材は比較的大きく、塊状のものが多いことが特徴である。

## 3. 旧地表成形

この墳丘基底部配石に囲まれる範囲には白っぽく硬い土が分布していた。調査段階の3月には気温が0度を下回ることが多く、特にこの現場は日当たりが悪いことから地面が凍結した。墳丘周辺の地山には霜柱が出現するが、この土質の範囲には霜柱は立たず、またつるはしがたたないほど硬かった。部分的に断ち割ったところ、厚さ5cm以下の灰褐色のよく練まる細緻混じりの土質が広がっていることは確

認できたが、明瞭な掘り込みは認められなかった。地山面に別の土を敷き、叩きしめるなどしたものであろうか。石室床面や石室基底石の埋設はこの上層を切り込んでおり、両者の底面は綺まりの悪い地山の土が現れている。

墳丘基底面では焼土や炭の散布などは認められなかった。

#### 4. 墳丘盛土

墳丘は石室・列石の石積みを1段積み上げるごとに盛土をおこなっていたことがうかがわれる。墳丘土層断面図では一見、墳丘内にひとまわり小さな墳丘があるよう見えるが、細部では内外の盛土が交互に乗っていることがわかった。石室から約2.2mまでの範囲で石室石材の背後を固めるための盛土をおこない、次に列石背後の内側にはほぼ水平かやや石室側が高くなる程度に盛土をおこなう。この工程を繰り返して墳丘全体の盛土を築いている。各工程の盛土は1~2層分に分層できたが、墳丘外側の盛土より石室周辺の盛土の方がより細かく作業をおこなっている様子が見える。個々の盛土を施す際の叩き締めの痕跡は確認できなかった。

盛土は地山である明褐色土やクロボク混じりの土による互層であるが、明瞭な使い分けをおこなったものではない。

#### 5. 周溝

石室開口部前面や標高の低い北西側部分を除くとほぼ全周にわたって周溝が巡っていたものと思われる。最も状況の良い東側では幅1.9~2.6m、深さ0.2mほどの規模を持つ。残存状況が不明瞭な箇所は、地山を形成する岩盤が現れている。周溝内からは墳丘列石からの転石が検出され、東側の周溝からは須恵器片が出土している。

周溝掘削土や石室掘削土のみでは墳丘盛土を崩すことはできないことから、墳丘盛土は他所から運んできたものであろう。墳丘周辺の地山の土も用いているが、盛土のほとんどが比較的細かい均質な土質であり、岩盤を削り取ったような粗い礫があまり含まれていないこともそれを裏付けている。

### 第3節 石室

前述のように墳丘中央部が陥没しており、石室天井石は破壊されていることが予想された。掘削を開始すると、石室内には大小の石材が乱雑に埋もれており、壁面も崩れていることがわかった。かなり大型の石材も存在したが、その大きさは石室幅に満たないものである。1号墳奥壁部分でみられるような持ち送り抜法によって天井部を小さくすれば天井石としても利用可能であるが、残存する玄室壁面の状況からは持ち送りの様子は何われない。天井石のほとんどが後後に持ち去られたものと思われる。また、開口部付近も乱されており、渓道の石積みもほとんど残存していないことがわかった。

石室に用いられた石材はほぼすべて同質のもので、加古川流域に分布するものである。大きく板状を呈するものもあり、比較的加工しやすいものであろう。

石室は南から43度西に振って開口しており、加古川の下流方向を向く。

## 1. 石室規模

石室の石積みは大きく破壊されており、特に奥部は2枚積み上げたものが残っているにすぎない。そのため、石室の全長は不明であるが、開口部左側（東側）の石積みが途中を失っているもの墳丘列石に連続するものとすれば、約7.0mを測ることになる。但しこの部分は外側に大きく開いており、前庭部である可能性が高い。玄門部から続く奥部の石積みのうち、本来の位置を保っている基底石はちょうど閉塞の石積みが認められた部分まであり、この位置を玄門部とすると、そこまでの石室全長は5.2mを測る。

玄室長は3.0m～3.24m。奥壁部の石室幅は1.76m、玄室中央部は東側壁が内側に傾いているが、西側壁が剥離状態を示すことから最大幅をもち2.14m、玄門部近くでは1.65mを測る。右袖幅は0.6m、左袖幅0.5m、玄門部幅0.55mを測る。残存する石室高は、奥壁と右側壁部で1.37mを測る。

## 2. 玄室石積み

奥壁は、幅1.72m、高さ1.34m厚さ0.28mの板石を立てて据えており、上面が長く水平になるように用いられている。石材の下部は地面を溝状に掘り込み、約0.46m差し込んで据えており、その空隙には小型の板石を据え、さらに小石を詰め込んでいる。第2石は、厚さ0.15～0.30mの板石を3枚小口積みにしており、背後は第1石より大きく突出するため、安定させるためには第1石上面まで墳丘の盛土をおこなう必要がある。おそらく墳丘の盛土と一緒に石室石材を積み上げていったものと思われる。第3石は長さ1.16m、幅0.42m、高さ0.38mの横長の石を横手積みに据えており、第2石の背後の不安定さをその重量によって防いでいる。両側壁との交点の背後には別の石材を配して流入土を防いでおり、右袖部でも同様であるが、それ以外では控え積みの石材は認められない。

玄室左側壁についても第3石までの積み方は奥壁と同様であり、板石を立て、その上は小口積み、その上にはやや重量のある厚手の石を横手積みしている。左側壁と奥壁との接合点は、側壁が内部へと倒れこんでいることや最も高さのある奥壁の石を支えるために、奥壁より内側に据えられていた可能性が高い。第1石は比較的平面積の大きな板石を3枚用いている。第1石の下部の埋め込みは0.2m以下である。他の壁の第1石は上面が長く水平になるように据えられているに対し、この左側壁は上面に小石を詰めて水平面を作っている。空隙部への詰め込みを除くと、最大で第4石まで積み上げている。

玄室右側壁は、奥壁下部の小板石の前に組まれている。第1石は板石を4枚用いている。第1石の下部の埋め込みは0.35m以下である。第1石は上面が長く水平になるように据えられており、下部の埋め込み内に別的小石を入れて水平を保とうとしている。このため4枚の第1石の上面の目地が通っている。空隙部への詰め込みを除くと、最大で第5石まで積み上げている。石材の積み上げ方は奥壁と同様であるが、第1石に板石を立て、その上は小口積みと横手積みを組み合わせている。左側壁と比べると、第2石にやや厚手の石材を用いている。奥壁側の第5石の上面や、同じレベルの玄門部付近の石積み背後には小型の板石が散漫ではあるが配されている。天井部を支える控え積みの可能性が高い。

袖石は、両側壁第1石（基底石）の前に組まれており、側壁が内部へ倒れ込むのを防いでいる。右袖は地面を少し掘り込んで、第1石の板石を平積み状に据えており、さらに厚みのある第2石を積んでいる。側壁との交点の背後には縦長の石を配している。左袖も地面を0.1mほど掘り込んで板石を平積みで据え、上に3枚積み重ねている。

### 3. 渓道

渓道部の石積みは袖石を除くと最大でも2石積み上げた状態でしか残存していない。袖石のみが地面を掘り込んで据えられているが、入口側の他の基底石は掘り込みを持たず、袖石基底石の上面と同じレベルに置かれており、特に左側壁基底面は徐々に上がっていく様相を示している。

やや厚みはあるが比較的小型の石材を小口積みと横手積みで据えているが、玄室の積み方とは異なることから、あまり高く積み上げることは想定できない。内部や周辺には天井石に相当するような規模の石材はなく、すでに持ち去られたか、あるいは、もともとなかった可能性がある。

平面的には玄門部が最も狭く、渓門部に向かって徐々に聞く。渓道幅は玄門部で0.55m、最大幅は0.8m、渓門部では0.75mを測る。

渓道床面はあまり綺麗ではなく、溝状を呈して基底石下面よりもやや深くなっているが、本来は玄室床面より一段高くなっていた可能性がある。

### 4. 閉塞施設

玄室内と同様、渓道部埋土中には多くの礫や石材片が含まれていたが、渓門部には長軸方向にやや長い小石が並んでおり、閉塞部と考えられる。

小型の石材を内側が弧状になるように二段ほど0.34mの高さに積み上げており、外側には小石を詰めている。渓道の側壁に沿って堆積した土の上に積んでいることから、二次以降の閉塞の可能性が高い。

閉塞部前後の渓道・前底部の堆積は非常に薄く、観察が困難であったため、渓道左側壁上の墳丘断面を観察すると、墳丘裾部からこの閉塞部まで大きく墳丘盛土を切り込んだ様子が窺われた。埋め戻した上にも石を配していることから追葬の際の整地の可能性が考えられる。埋め戻したのち、墳丘上にも盛土し、さらに墳丘裾にも盛土している状況が看取された。

### 5. 敷石

玄室内床面には一部樹根によって乱されていたが、敷石が良好に残存していた。最大でも長径40cmまで、平均して一辺が15cm程度の板石が一部重なりあっているものの、1層敷かれていた。玄室入口の袖石周辺には認められなかった。玄門部付近の石は大振りなものや塊状のものもあり、敷石ではないかもしれない。敷石は盜掘などによって乱された様子は見られず、埋葬の最終段階の状況を保っているものと判断され、袖石・玄門から40~50cmの幅で石が敷かれていなかったものと思われる。敷石下面の地面はあまり締まりの良くないものである。

### 6. 遺物出土状況

敷石検出段階から、床面の保存状況が良好であることが判明し、副葬品等の遺物も良好に残されていることが予想されたが、予想に反して石室内からの遺物の出土は非常に少なかった。一部埋土を篩にかけたが、玉類の出土も見られなかった。盜掘にあったというより、追葬の際に片付けられたものであろうか。

玄室左奥の敷石の間から鉄製刀子片、やや奥右側の敷石上から完形の須恵器提瓶（8）、また玄室ほぼ中央の敷石上から鉄刀子片が出土した。

また、周溝内や盛土内から土器や石器が見つかっているが、1・2区周溝出土のものは東側に近接す

る8号墳から流出したものもある。石器類は墳丘下面からは出土していないことから、墳丘下に同時代の集落址が存在した可能性は低いと考えるが、これらが比較的近隣から運ばれたであろう盛土に含まれていたとすれば、近隣に同時代の遺跡が存在していた可能性がある。

#### 第4節 遺物

遺物のうち、土器は8のみが玄室床面から出土したが、それ以外は玄室外の墳丘裾部等から出土したものである。鉄器はすべて玄室内から出土した。石器は墳丘盛土などから出土している。

##### 1. 土器（図版9・写真図版22）

1は須恵器杯身である。体部には自然輪がかかる。TK209型式である。2は須恵器杯身である。口径が17.6cmと比較的大きく、体部が深い形状が特徴である。中西山3号墳<sup>1</sup>（三田市）等で出土しているのと同様な大型有蓋高杯の可能性もある。

3・4は須恵器無蓋高杯である。3の杯部は無文で口縁と底部の境に鈍い棱をもつ。4の脚部には2段の透かし孔が3方向に穿たれている。ともにTK43型式である。

5・6は須恵器甌である。5の外面調整はカキ目による。

7は須恵器有蓋短頸壺である。MT15型式である。

8は須恵器提瓶である。口縁部は内湾する。体部の外面調整はカキ目によるが、背面にはその後部分的にヘラケズリを施す。TK43型式である。

9は長頸壺である。外反する頸部上半および肩部に鈍い凹線を2条巡らせる。底部は平底で体部下半はタタキ目が残る。TK46型式である。

10は須恵器甌である。口縁端部に2条の凹線を施す。口頭部に波状文はないが、ヘラ描き沈線を施している。

##### 2. 鉄製品（図版9・写真図版22）

出土した鉄製品は12点を数える。そのうち、7点の鉄製品を国化した。

M1・2は刀の鈔である。2片であるが同一個体の可能性もある。刀背部に位置する方が丸く、刃部側が尖る倒卵形を呈する。象眼は認められない。

M3・4・5刀子である。M3は切先の破片である。M4は切先を欠き、茎が長いが目釘穴が認められない。刀闊・棟闊とともに確認できる。M5は刀身が長い。切先・茎を欠く。

M6・7は飾り弓に装着する両頭金具<sup>2</sup>である。細い軸部と、その両端に笠形を呈した頭部をもつ。軸部の外側には、両端が花弁状になった筒があったはずだが、M6・7ともそれを欠いている。兵庫県内では竹ノ内3号墳<sup>3</sup>（養父市）から5点、状覚山4号墳<sup>4</sup>（加西市）から2点の出土例がある。

<sup>1</sup> 兵庫県教育委員会 1993『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第125冊

<sup>2</sup> 小串田横穴群（いわき市）から、木製の弓の末羽部に5cm間隔で4個、本羽部に1個の金銅製両頭金具が装着された形で出土している。（いわき市 1988『小串田横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第20冊）

<sup>3</sup> 八鹿町教育委員会 2000『竹ノ内古墳群』兵庫県八鹿町文化財調査報告書第15集

<sup>4</sup> 報告書に掲載されていない。2点とも軸部外側の筒が部分的に残存し、長さはそれぞれ3.3cm、3.5cmを測る（兵庫県教育委員会 2006『加西南産業団地内遺跡調査報告書』兵庫県文化財調査報告第302冊）。

### 3. 石製品（第2図・写真図版12）

S1はチャート製の剥片で、寸詰まり状を呈する。長さ21.0mm、幅20.5mm、厚さ5.5mm、重さ2.3g。

S2はサスカイト製の使用痕のある剥片で、剥片の末端部に使用による微細な剥離が残る。長さ35.0mm、幅34.2mm、厚さ6.5mm、重さ8.3g。

S3はサスカイト製の貝殻状を呈する剥片である。長さ20.5mm、幅33.0mm、厚さ6.0mm、重さ3.8g。

S4はサスカイトの剥片で打面部を欠損している。長さ28.0mm、幅32.5mm、厚さ6.3mm、重さ5.6g。

S5はチャート製の加工痕のある剥片である。石器の未製品の可能性が高い。長さ15.5mm、幅13.4mm、厚さ2.9mm、重さ0.48g。

S6はチャート製の剥片で、スパール状を呈し、打面部を欠損する。長さ22.6mm、幅6.0mm、厚さ3.6mm、重さ0.4g。



第2図 石器

第3表 遺物観察表

土器

報告番号	種別	器種	法量(cm)			出土位置	残存率
			口径	器高	底径		
1	須恵器	杯身	(12.90)	3.15+		2区周溝上層	たちあがり～体部1/8
2	須恵器	杯身	(17.80)	6.20+		1区墳裾および周溝	たちあがり～体部1/8
3	須恵器	高环	(9.80)	3.30+		1区溝道前	环部1/8
4	須恵器	高环	—	6.55+	9.00	1区溝道前	脚部3/8
5	須恵器	甌か	12.40	5.70+		1区周溝および墳裾	口縁部～頸部1/2
6	須恵器	甌か	—	5.15+		1区周溝および墳裾	体部下半1/4、底部完存
7	須恵器	短頸壺	(9.40)	2.60+		1区墳裾	口縁部1/8
8	須恵器	提瓶	6.00	17.90		玄室奥床面	完形
9	須恵器	長頸壺	8.60	22.85	8.00	2区周溝	頸部1/2、体部1/3
10	須恵器	壺	(16.30)	4.60+		1区墳裾	口縁部1/4

鉄製品

報告番号	種別	器種	法量(cm)			出土位置	重量(g)
			長さ	幅	厚さ		
M 1	鉄製品	鐔	5.30	2.20	0.45	玄室石敷上	5.6
M 2	鉄製品	鐔	2.40	2.80	0.55	玄室石敷上	3.5
M 3	鉄製品	刀子	4.60+	1.35	0.55	玄室奥東の床面	5.3
M 4	鉄製品	刀子	11.50+	1.95	0.40	玄室中央床面	19.6
M 5	鉄製品	刀子	17.20+	2.00	0.45	玄室中央床面	39.6
M 6	鉄製品	両頭金具	3.60	0.95	0.60	玄室床面の敷石の隙間	1.8
M 7	鉄製品	両頭金具	3.55	0.70	0.70	玄室床面の敷石の隙間	1.6

※法量の( )は復元値。+のついた数字は残存値。

## 第4章　まとめ

### 第1節　石室について

高松3号墳で検出できた横穴式石室は天井石を含む石室上部を失っているが、石室基底部はよく残存しており、両袖を有したものである。羨門部までの石室全長は5.2mを測り、玄室長は3.0m～3.24m。奥壁部の石室幅は1.76m、玄室中央部は最大幅をもち2.14m、玄門部近くでは1.65mを測る。右袖幅は0.6m、左袖幅0.5m、玄門部幅0.55mを測る。残存する石室高は、奥壁と右側壁部で1.37mを測る。この石室規模はTK43～85型式までの横穴式石室の特徴に一致する。

また、玄室の石材の積み方も基底石として板石を立てた上に小口積みを組み合わせて構築しており、丹波市青垣町の中佐治5号墳の堅穴系横口式石室の構築方法と類似している。更に羨道部は、開口部に向かって短く開く形態であり、羨道部基底石は掘り込みをもたず、開口部に向かって徐々にあがっていく状況が看取でき、これも堅穴系横口式石室の構造に類するものである。

加古川中上流域に点々と分布する堅穴系横口式石室は、南丹波では正方形に近い玄室の平面形をもつものが多く、MT15型式併行期では、丹波市の井原至山古墳、同じく多利向山C-2号墳。MT85型式併行期の丹波市火山10号墳、多可町の城山1号墳、TK43型式併行期では丹波市の高坂1号墳などがある。このタイプの石室は瀬戸内の掛保郡のものと共通しており、加古川を源流とする可能性が考えられている。

これら正方形タイプの玄室をもつ南丹波に対して、京都府域を含む北丹波では縦長方形の玄室プランをもつものが多い。先述の中佐治5号墳も後者の一例であり、出土遺物からMT15型式併行期のものである。

一般に群集墳の石室は縮小するといわれているが、加古川流域における石室規模の縮小についてもTK43型式併行期以降の変化が検討されており（池田2005、岸本2005）、TK209型式期からTK217型式期に変わる頃には石室奥壁幅が1.3～1.4mを超えるものが無くなる。

高松3号墳の石室床面奥壁幅は、1.76mを測り、加古川流域の両袖式石室では、丹波市丹南町の野坂大谷12号墳や加古川市の池尻8・17・18号墳、多可町中区の東山15号墳などと同規模である。これらの古墳は東山15号墳を除くとTK43～TK209型式の時期のものである。TK217より新しい時期の東山15号墳については、同古墳群の石室規模の特異性が指摘されており（菱田2002、岸本2005）、ここでは対象外としておく。

高松3号墳がTK43～TK209型式併行期であるなら、石室内出土須恵器ともさほど齟齬がないが、前述のように石室構造からみると古く考えられ、TK10・MT85～TK43型式併行期とすることも可能である。

堅穴系横口式石室の系譜をひき、北丹波地域の石材の用い方と、南丹波地域の玄室平面形を有する高松3号墳は、定型化する前の横穴式石室の過渡期の様相と、後期になっても木棺直葬を多用する地域の残る加古川流域での横穴式石室採用のひとつの状況を示しているといえよう。

## 第2節 墳丘及び列石について

横穴式石室墳の墳丘に配された列石については、

- ① 土留めなど封土崩壊を防ぐ目的で用いられる墳丘内列石。(二重・三重に施される場合が多い。)
- ② 正面観を重視した墳丘の視覚化を図る開口部列石。
- ③ 墳域の区画を行ったり、外装を意識して墳丘裾部に列石を取り付けるもの。(渡辺1995)に分類されている。

### 高松3号墳の列石

今回検出できた列石は、視覚的には北及び西側の加古川や対岸の低地からよく見える側面に顕著に積まれていた。南東部側ではあまり良好な列石は残存していないかったが、それは後世の擾乱によるものだけではなく、当初からあまり丁寧には積まれていなかった可能性がある。その理由としては外部からの視覚効果が低いことや、尾根筋の高い側であることから石室石材等の搬入を行う作業路として利用されたことも関係しているのではなかろうか。石室を墳丘と一緒に構築する構造であるだけに、せっかく積み上げた列石を傷めずに石室石材や墳丘盛土を搬入する作業路を確保したと思われる。

西側の列石ではその積み上げ方や並べ方の規則性を見いだすことができた。墳裾近くに並ぶ第1列ではまず、塊石を並べ背後に石上面まで盛土を行い、盛土にかかるようにやや小振りの石を小口積みする。この2段の石は接しており、石積みとなる。塊石の前面の1段下がった位置にやや小振りの石を主として横手積みして貼り付けるように並べている。この列石は他の列の石と接してはいるが、積み上げたものではない。側面観では3段の石垣状に見えるが、2段の石積みとその前面に1列貼り付けたものである。

第1列目の列石前面から約1m内側に第2列目の列石が巡る。墳丘全周に巡るものではなく、所々途切れている。この列石は一部には下に2石ほど石を配した部分はあるが、基本的には第1列列石上面より高い位置の盛土上に並べられている。比較的大きめの塊石を横方向に用いており、その内側に接する程度の位置にもう1段、やはり大きめの石を小口をそろえて並べている。第1列と第2列の列石間には比較的小さな石を置いて石段状にしている。さらに背後の盛土上にもう1重の列石が並ぶ。この第2列の列石と第1列の列石間にもう1石配した部分も観察された。

ここまで述べてきた列石は、墳裾部の第1列を除くとすべて盛土上に並べられており、基底部から石を積み上げたものではない。多くは表土直下で検出されており、また墳裾部の第1列では前面に石を貼り付けるように並べるなど外装的な意味合いが受けられる。そこには墳丘内列石とするより、これまでに外護列石などと呼ばれていた視覚的効果が認められるのである。

但し、天井石を失うほど後世の手が入っていることを考慮すれば、墳丘はさらに高く盛土も多かったものと推測できるから、古墳建築の最終段階にはこれらの列石は墳丘内に埋没していた可能性も考えられる。そこでこの列石を視覚的に外部へ訴えたのは、石室内に棺を納め、石室を閉塞するまでであったと考えることができよう。この時点つまり埋葬の段階で何らかの祭祀行為が行われたことは想像に難くなく、その際に参列した人々に古墳の莊厳さを示したものであろう。残念ながら今回は列石上での祭祀行為を示す資料は得ることはできなかったが、列石に外装的な意味を持たしたのは、比較的短期間であ

った可能性を考えたい。

もちろん、列石のもう一つ意味合いには、墳丘を高く積み上げるという土木工学的な役割があり、石室背後を控え積みではなく、墳丘盛土によって支持することができるという構造上の利点があり、墳丘表面付近に見られる列石は両方の意味合いを兼ね備えたものであろう。

さて今回の調査ではもう1例列石を確認することができた。それは墳丘内に完全に埋め込まれており、石室が組み上がった段階では全く見えなくなるものである。その列石はこれまで述べてきた列石と比べても大振りの塊石をやや間隔を空けて、古墳墳丘の基底面上に並べている。これが墳丘基底部の配石である。

間隔を開けて並べていることからも墳丘盛土の土留めとしての役割は考えにくい。いくつかの古墳で確認されている第一次墳丘に伴う可能性を考えたが、土層断面からは判断できなかった。

この墳丘基底配石に囲まれた内側の基底面上の土は、周辺の地山とは異なっており、どのような作業を行ったかは不明であるが、なんらかの行為が行われており、その行為の一環としてこの基底部配石が並べられたものと想定できる。この配石の内の2石が石室開口部の両側に配されていることから、墳丘や石室を構築する際の目安となっていたことが推測でき、古墳全体の基底部を決定するために配されていたものであろう。これは曾2003による「封土の基底部周辺につくられたもの、封土内に別につくられたもの」として「周状列石」としたものに近い。

このように高松3号墳で検出された列石は、単一の目的によって構築されたものではなく、その部分ごとに別の目的や意味合いが混在して構築されたものと考えることができる。

高松古墳群では現在のところ列石が検出された古墳はこの3号墳のみであるが、傾斜の強い高い墳丘をもつ1号墳などでは採用されている可能性がある。同一の古墳群内でも列石を有する古墳とそうでない古墳が存在することは知られているが、それが時期差によるものなのか、被葬者の出自によるものか、あるいは別の理由によるものかはまだよくわからっていないのが現状である。

高松3号墳では横穴式石室の構築と、墳丘の列石の構築が同時に進められていたことがわかり、本来、両者の関係は不可分であった可能性を示している。しかしながら、先行すると考えられる竪穴系横口式石室墳で列石を有するものではなく、中佐5号墳では一部に葺石を有している。また、火山古墳群では畿内型石室の影響を受けた竪穴系横口式石室墳（10号墳）では列石は見られず、その次の段階の竪穴系横口式石室の伝統を残した横穴式石室墳（7号墳）や、さらに後出する在地色を失った横穴式石室墳（8号墳）で列石を採用している。同様に北丹波地域でも横穴式石室の導入が先行し、墳丘の列石は1段階か2段階遅れて導入されるようである。

#### 〔参考文献〕

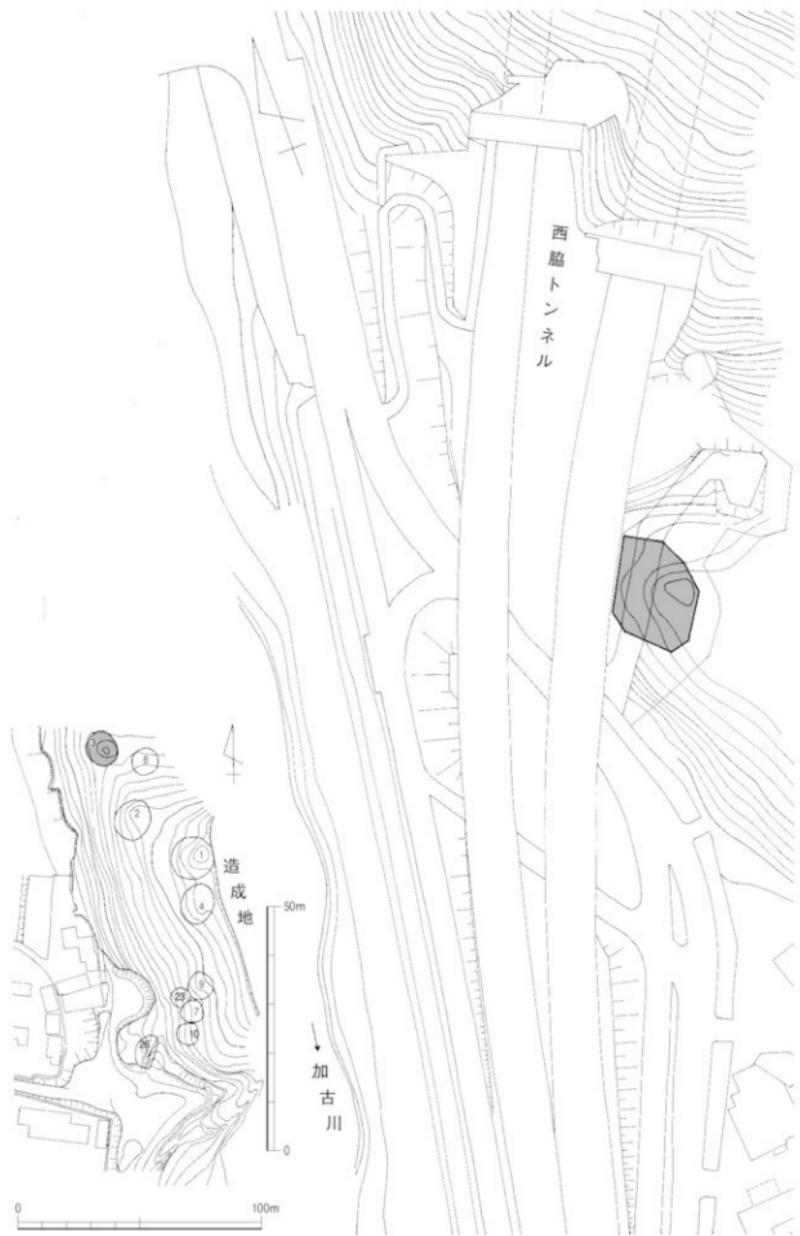
菱田哲郎2001「東山古墳群の形成過程と造墓原理」「東山古墳群Ⅱ」中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

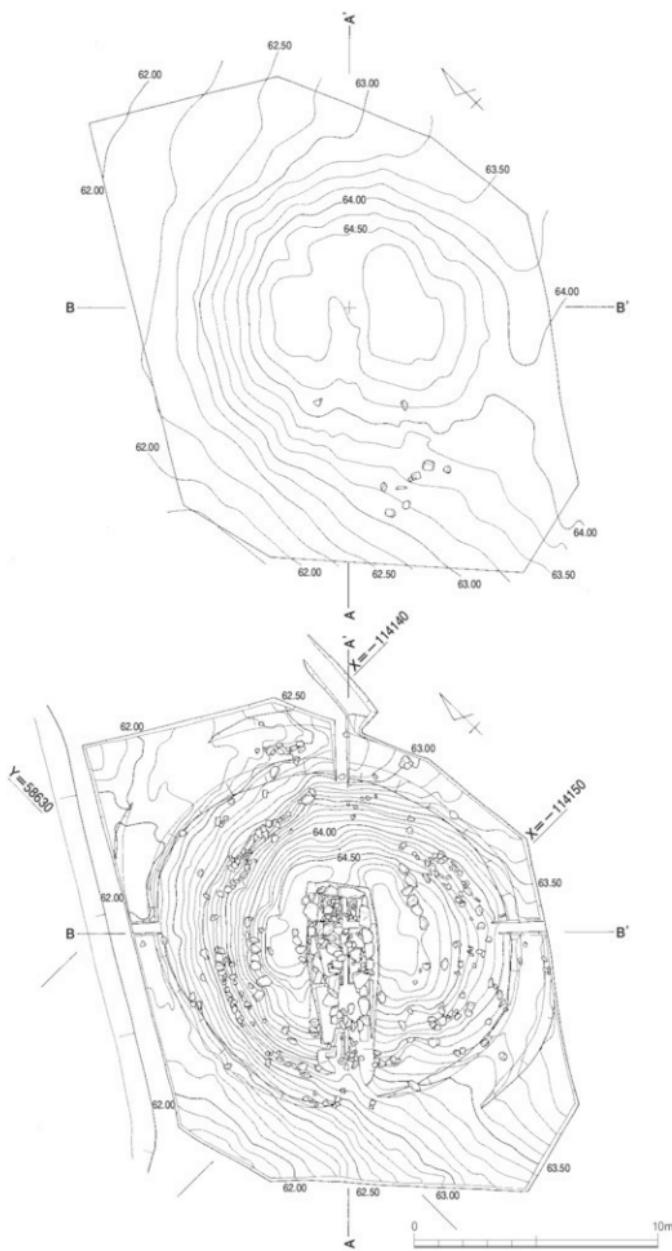
平田 学1994「外護列石を持つ古墳—兵庫県を例にして」「文化財学論集」

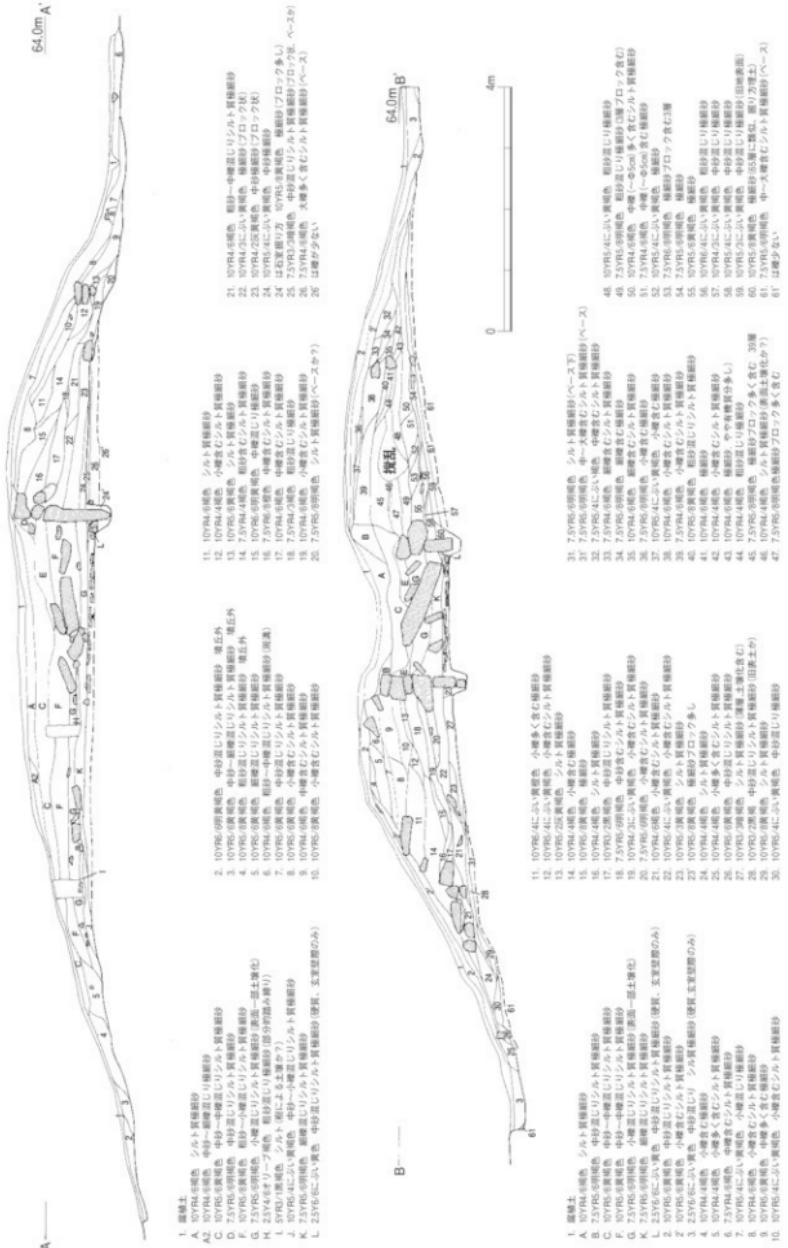
平田 学1995「若荷谷古墳の外護列石の位置付け」「東家地古墳 若荷谷古墳群第3号墳」三田市教育委員会

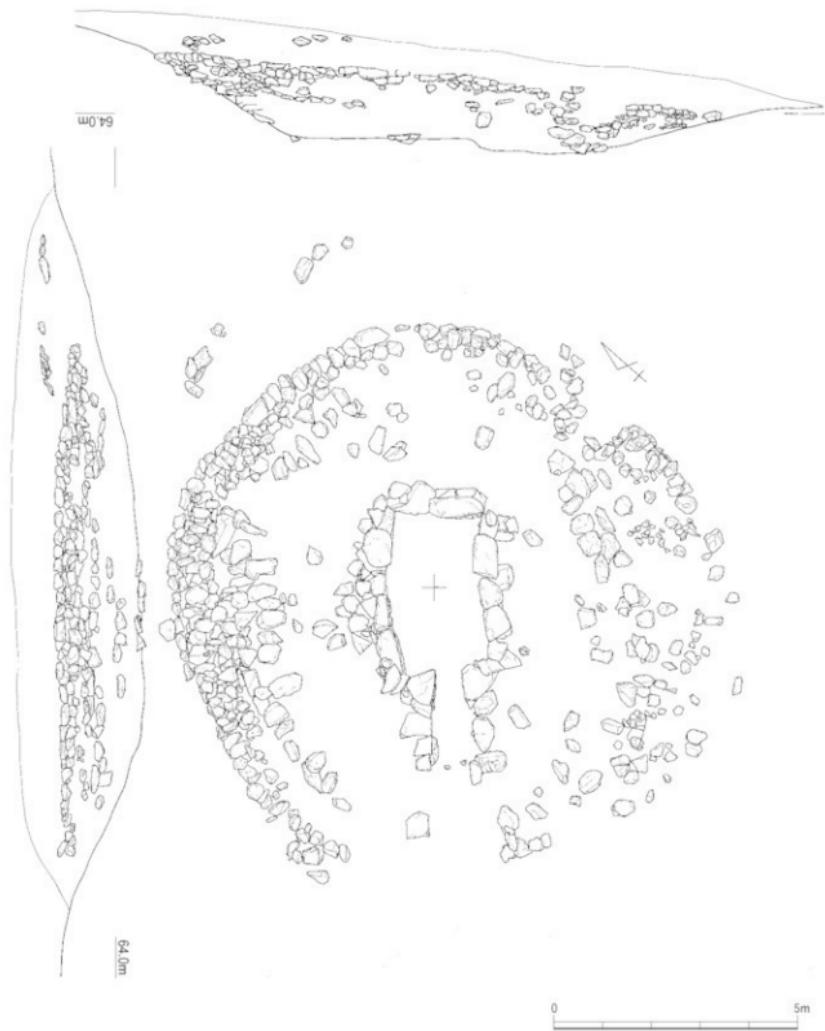
- 渡辺邦雄1995「畿内における終末期群集墳の外部構造－特に列石を中心として－」『古代文化』第47巻第2号  
『古代學協會』
- 曾 永茲2003「古墳封土の区画築造に関する研究」「古墳築造の復元的研究」雄山閣
- 池田征弘2005「古墳群について」『野坂大谷古墳群』兵庫県文化財調査報告第282冊 兵庫県教育委員会
- 岸本一宏2005「加古川流域における後半期の横穴式石室について」「加西南産業団地内遺跡調査報告書」  
兵庫県文化財調査報告第302冊 兵庫県教育委員会
- 西脇市教育委員会2002「高松古墳群」「西脇市古墳調査集報」西脇市文化財調査報告書第12集
- 兵庫県教育委員会2004「高坂古墳群」兵庫県文化財調査報告第281冊
- 兵庫県教育委員会2008「中佐治古墳群」兵庫県文化財調査報告第359冊
- 兵庫県教育委員会2004「火山古墳群・火山城跡・火山道路」兵庫県文化財調査報告第283冊

図版1  
高松古墳群と3号墳の位置



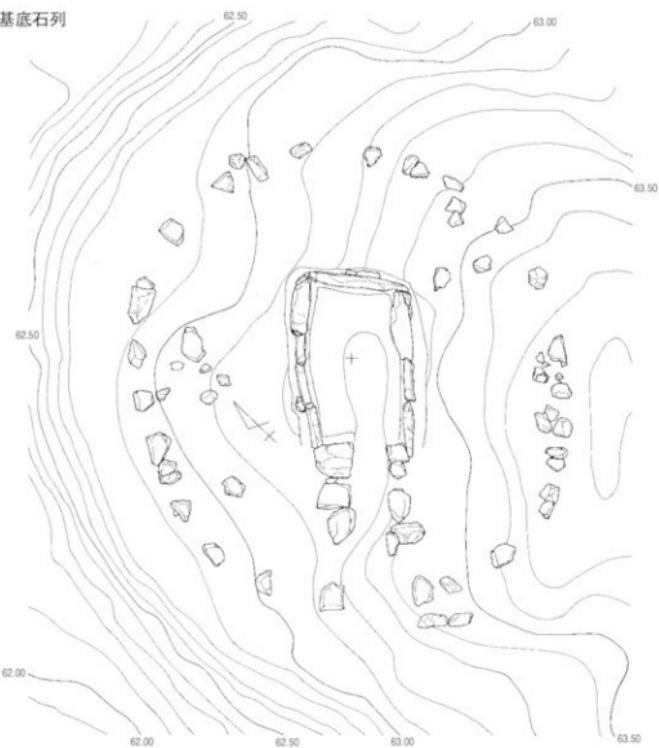




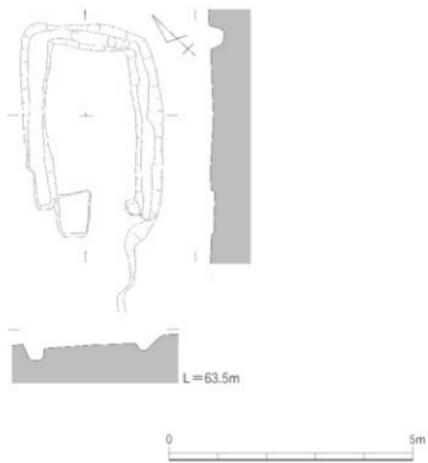


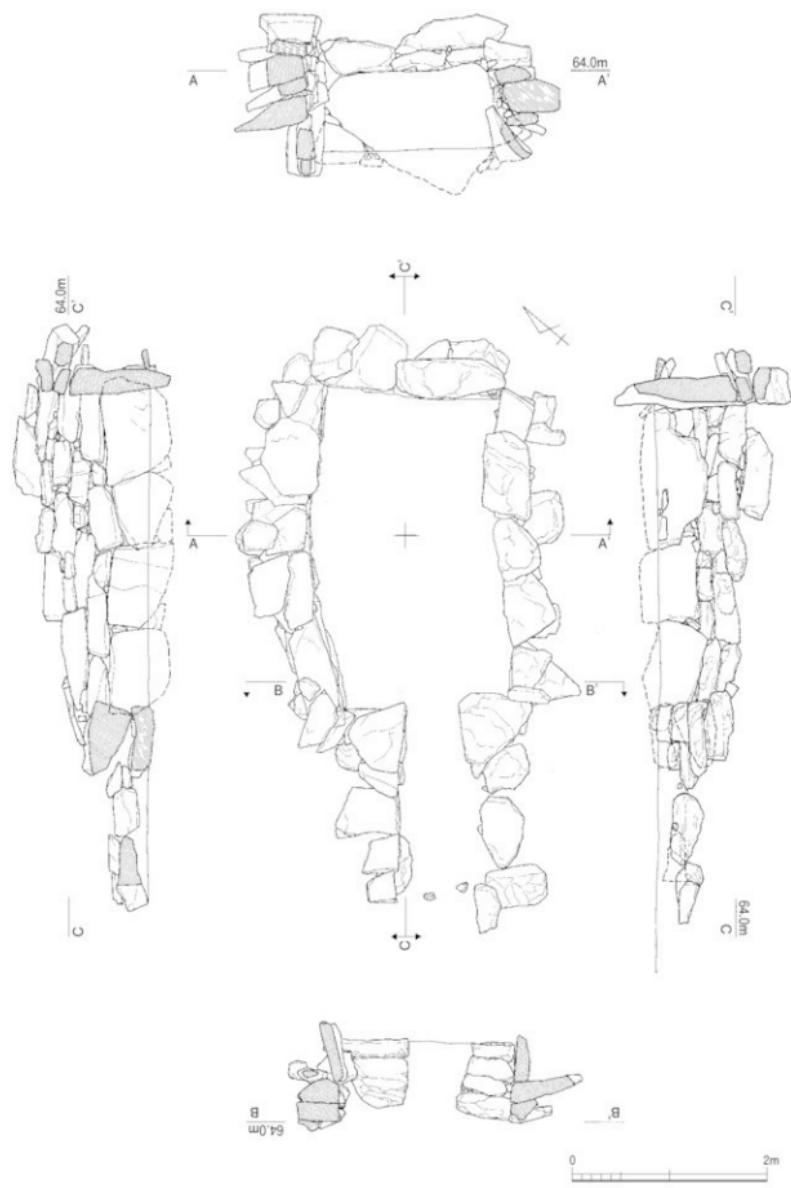
## 墳丘基底石列・石室掘方

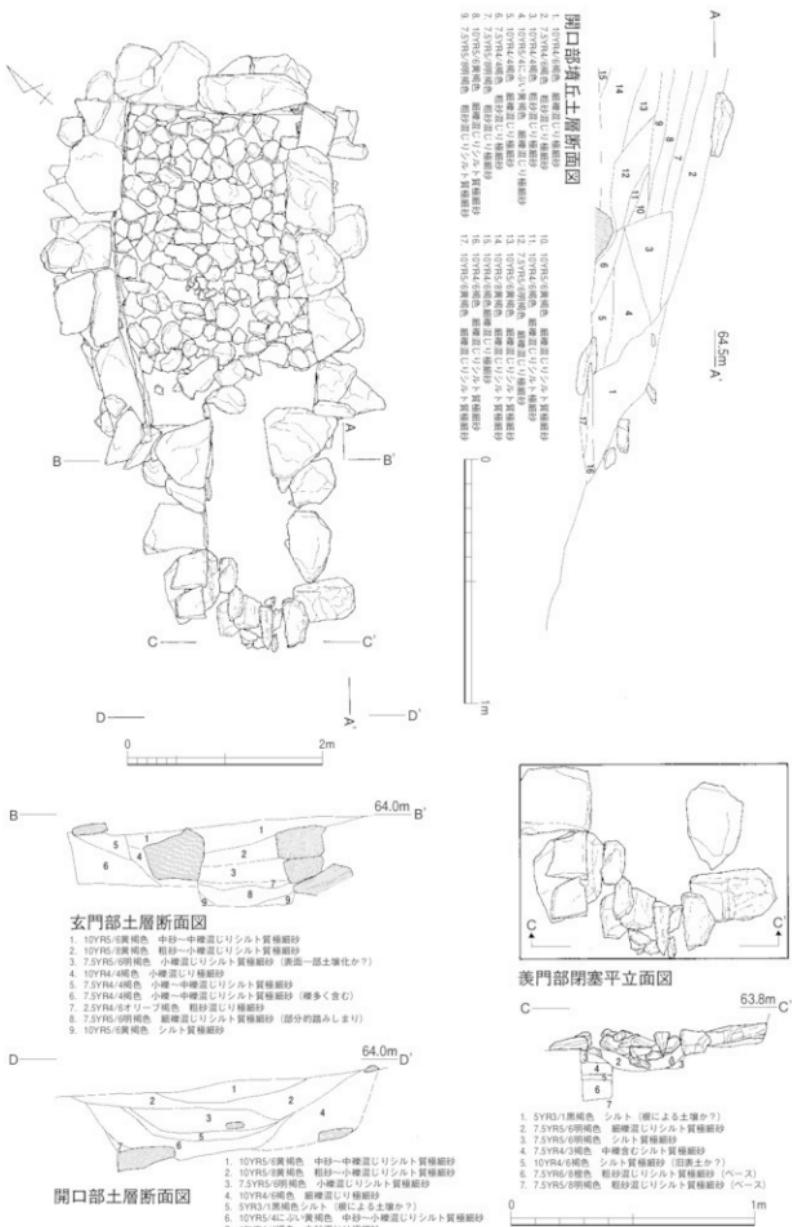
墳丘基底石列

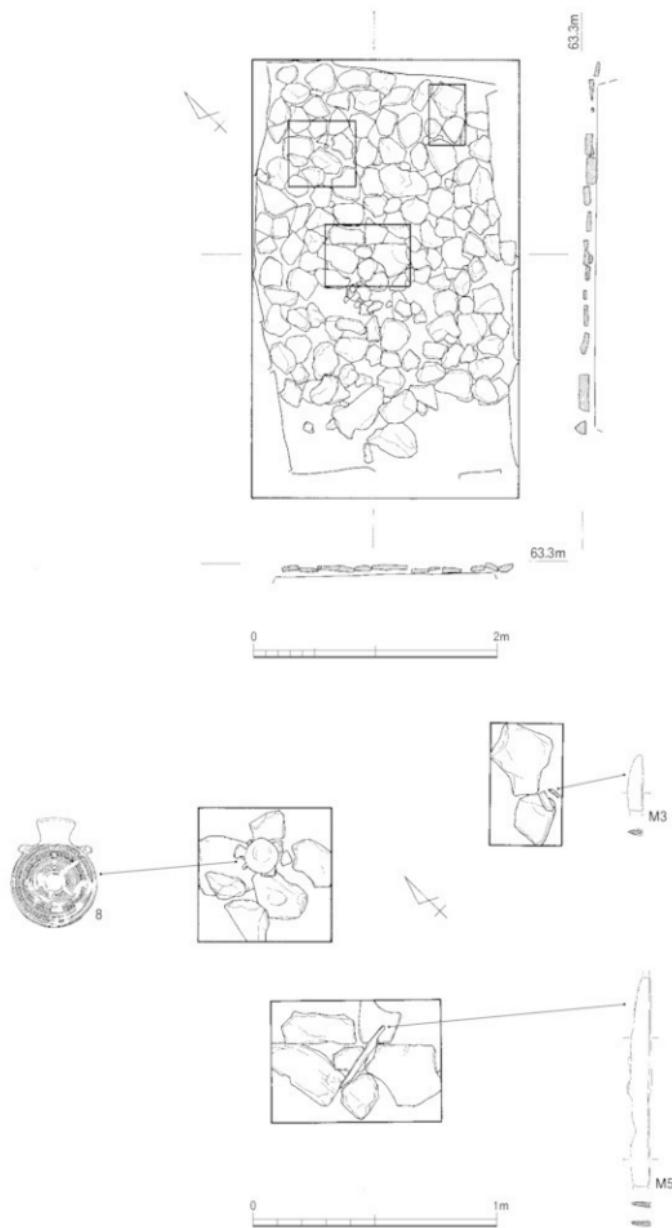


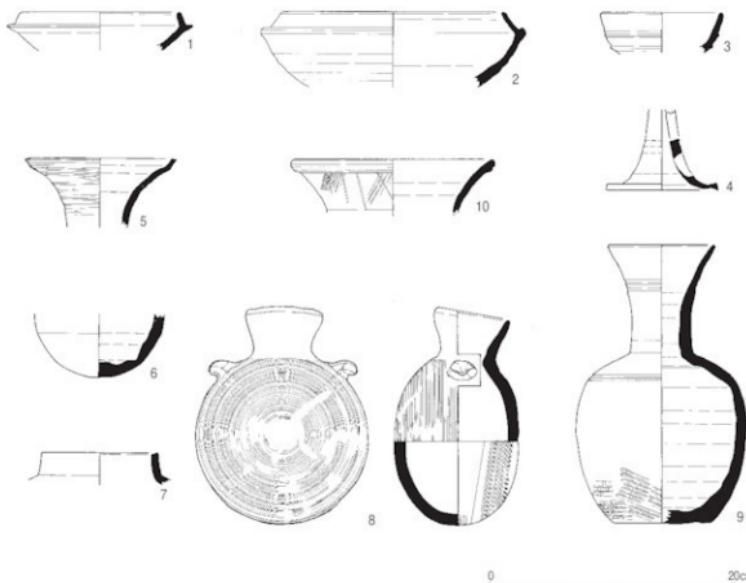
石室掘方



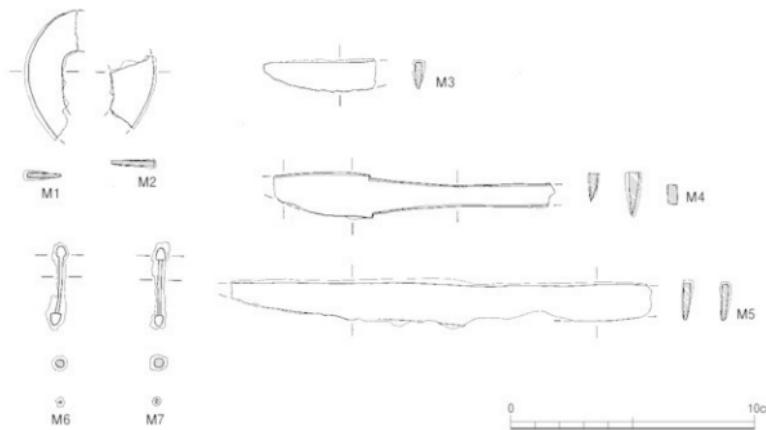








0 20cm

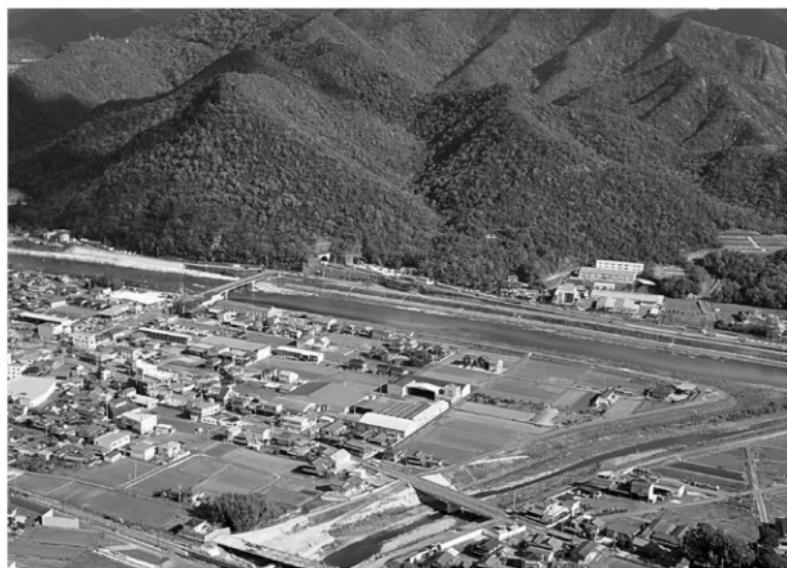


0 10cm





高松3号墳全景



遠景 南西から



遠景 北西から



遠景 西から



遠景 北から



遠景 北西から



調査前の3号墳(昭和49年度)



調査前の3号墳



調査前の3号墳(東から)



調査前の3号墳(南から)



調査開始直後(南から)





墳丘北西側の列石



列石検出状況(北から)



列石検出状況(西から)



墳丘断ち割り断面(南から)



墳丘断ち割り断面(南から)



墳丘断ち割り断面(南から)



墳丘断面 西側列石部



墳丘断面 東側列石部



墳丘断面 北側列石部



列石検出状況



西側列石(北西から)



西側列石(南西から)





墳丘基底面検出(南から)



墳丘基底面検出(西から)



石室基底石と墳丘基底配石



墳丘基底配石



横穴式石室全景



玄室全景 玄門部から





羨道 玄門部の状況



羨道



羨門部閉塞





左側壁の石積み



(左) 左側壁の石積み  
(右) 右側壁の石積み



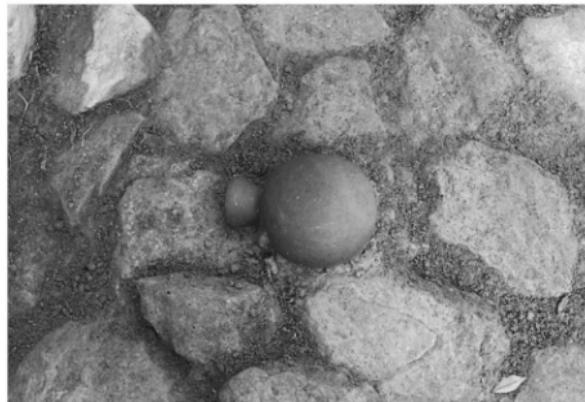
奥壁右の背面



石室基底石



基底石掘方



玄室内遺物出土状況



玄室内遺物出土状況



周溝遺物出土状況



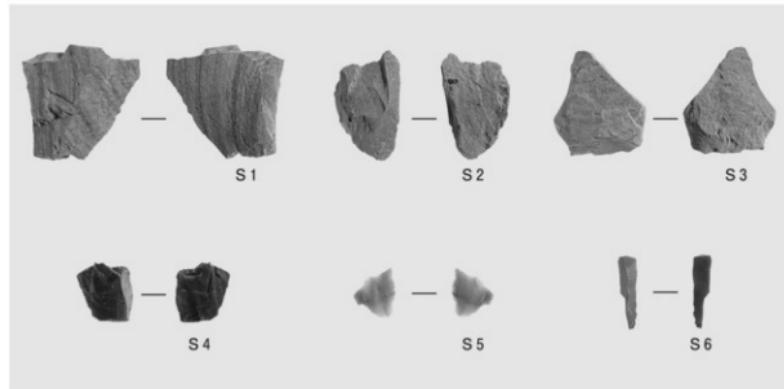
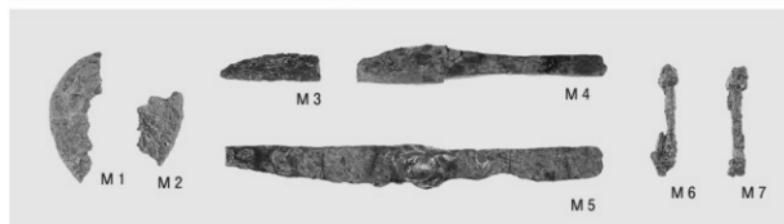
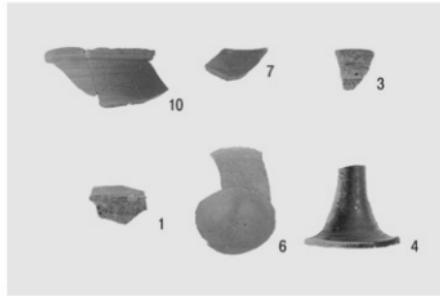
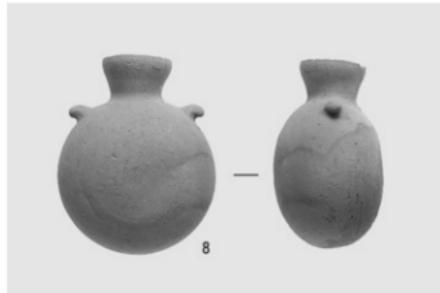
高松 1号墳石室奥壁



高松 2号墳



高松 4号墳石室奥壁



## 報 告 書 抄 錄

---

兵庫県文化財調査報告 第437冊

## 高松3号墳

— 175号西脇バイパス事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成25（2013）年2月28日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：福田印刷工業株式会社

〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号

---



